37. 合成の誤謬

新聞のコラムに「合成の誤謬（ごびゅう）」の話があった。

「合成の誤謬」とは、将来が不安だからと節約と貯蓄に励むのは一人の判断としては間違っていないが、全員がそうすると物もサービスも売れなくなり経済は不況に陥り、収入の減少する人が続出し、社会全体としては総貯蓄額も増えなくなる、というように、一人一人の判断としては間違っていなくても全員が同じ行動をとると誤りになるというような意味である。

このような例は沢山ある。観客席でよく見ようとして一人が立ち上がる。そういう人が増えて皆が立ち上がると結果として意味をなさなくなる。低賃金で人を雇うのも同じ類だろう。

小泉内閣がグローバリズムの名のもとに派遣法を改正し、非正規社員が大幅に増え貧富の格差が広がったのも、一例に加えられるのだろう。

「合成の誤謬」とはやさしく言えば、部分部分は正しいが、全体としては正しくなく、おかしな結果をもたらす、ということだ。「合成の誤謬」と難しく言わなくとも、多くの人は感覚的に知っていることでもあろう。

新聞のコラムを見て数日後、今度は市の消費生活センターの出す会報誌の巻頭の文を見たら、「合成の誤謬」というタイトルだった。新聞のコラムも消費生活センターのも新型コロナに関する記述がある。コロナウイルスの流行がそうさせたかのようである。

後者では、「ウイルスから身を守れるのはマスクだと聞きマスクを買うことは合理的な行動、しかし結果的に使い切れないほどのマスクを持つ人がいる一方、医療現場などどうしても必要な人にマスクが不足するという社会全体としては極めて好ましくない事態を引き起こす」として、「自分自身だけでなく、身近な人や社会を守るため困難な状況に遭遇した時こそ情報の真偽を見極め、自らの情報発信も誤解されないよう配慮しよう」とある。

前者では、「感染を防ごうと家に閉じこもり、自粛を重ねるのは一人一人の判断は間違っているとはいえない、だが全員がそれを実行すると社会が維持できなくなる。なぜこのようなことが起こるか、『合成の誤謬』には人間や企業などを社会的結びつきのなかにある存在としてとらえていないからだ」という。「個人も企業も単体では存在しない、様々な社会的結びつきのなかで維持していて、自然をふくめた社会の維持が全ての活動の生命的基盤だ」という。ここまでは理解できる。

だが、「社会を維持するとは、直接的、間接的に結び合っているつながりを維持するということ。なぜそれが必要かといえば、人間もまたこのつながりのなかで、生命をたえず再生産しているからである。コロナウイルスは、生命を独立したものとしてのみとらえる現代の生命観に、変更を迫っているのだろう。独立した生命の基盤には結び合う世界があるという生命観に、いま私たちは立ち返ってみる必要があるのかもしれない」となると、少し分かりづらく難しくなる。このコラムの見出しは「営みを守り合う生命観」とあるから、人間としての優しさを持った対応が必要と著者は言っているのだろうと解釈した。

ところで、合成があるなら分割はどうなのか。「分割の誤謬」だ。分割の誤謬は、全体としては正しいが部分的にはおかしいということになる。全体の性質から部分の性質を言うのは難しく間違う恐れがある。「日本人は器用だから、日本人である彼は器用だ」「A社は一流企業だ、そのA社に勤めるB氏は一流人物だ」の類（たぐい）は、世の中ではよく間違って使われる。自戒する必要ありだ。

（2020 年 7 月 18 日）